

鯨 研 通 信

第 356 号

1984年 8月

財団法人 鯨類研究所 〒136 東京都江東区大島 3丁目32番11号(大島町ビル)電話 東京 (683) 3621~2
日本鯨類協会



オオギハクジラとカワイルカ

筑波大学医療技術短期大学部 神谷 敏郎

歯 鯨 の 新 種

下顎骨の中央に (meso)、武器 (oplon) となる歯 (dens) をもった鯨、*Mesoplodon* はアカボウクジラ科に属する体長が、5~6mにまで成長する歯鯨である。和名をオオギハクジラと言う。わが国では東京大学名誉教授・小川鼎三博士 (1901~1984) によって最初の学術報告 (1938) がなされた。小川先生が入手された *Mesoplodon* の歯の外形が、扇子を展げたような形をしていたことから、扇歯鯨と命名された。故ついで名前が並ぶ歯鯨の中では珍らしく風流な和名がつけられている。

アカボウクジラ科は5属18種から構成されている。アカボウクジラ属 (1種)、ツチクジラ属 (2種)、ヒュベロオドン属 (2種)、タスマニアクジラ属 (1種) およびオオギハクジラ属 (12種) である。

オオギハクジラ属は12種もの種類に細分類されているが、これは他の歯鯨属に例をみないもので異色の存在である (歯鯨亜目は6科34属70種に分類されているので、このうちの12種であるから1属で全体の17%も占めていることになる)。

オオギハクジラは日本近海では珍鯨であり、これまでに約16頭しか発見されていない。¹⁾ もっともこの他にアカボウクジラとかツチクジラとして処理されてし

まったオオギハクジラも少なくないと考えられるので、実際にはもっと多くの例数がみられている筈である。種類はこれまでに12種類中の4種類、*Mesoplodon bowdoini*, *M. carlhubbsi*, *M. ginkgodens*, *M. stejnegeri* が報告されている。

日本で発見された4種類のオオギハクジラの中で、最も多い種類は *M. ginkgodens* で10例の標本が確認されている。したがって6割がこの種類で占められている。

M. ginkgodens はイチヨウハクジラの和名をもち、その模式標本 (Type specimen) は西脇昌治と神谷敏郎によって採集、研究され、新種として鯨研英文報告第13号 (1958) に報告されたものがある。鯨目の分類表をみると、ヒゲ鯨亜目と歯鯨亜目併せて約80種類に分類されているが、日本人によって研究、命名された新種は *M. ginkgodens* (Nishiwaki & Kamiya, 1958) 1種のみである。

この研究の対象となった鯨は、1957年9月22日に神奈川県大磯海岸に引き上げられた、体長472cmの雄であった。鯨は横浜の魚市場に運ばれて解体された。この報道を知った西脇昌治博士 (1915~1984: 当時鯨類研究所々員) は早速に手配して、この鯨の残骸を確保された。お誘いをうけ私も同行させてもらった。横浜魚市場の一隅で大磯鯨の亡き骸と対面した瞬間、期せずして二人して *Mesoplodon* という言葉を発し興奮した。第1号小川標本の採集から22年目の、わが国での第2号標本との出会いであった。

大磯標本を東京大学医学部解剖学教室に運び込み、外部計測、手羽のX線撮影、骨格標本作製など一連の作業を進めた。初冬になって見事な骨格標本 (頭蓋骨、脊椎骨、右手羽) が揃った。小川先生の指導の下

1) 世界的にみると、各国の博物館や研究機関にはかなりの数の標本が保存されている。1968年に *Mesoplodon* を徹底的に調査究し、その分類に大きな業績を残された、元シカゴ博物館自然史部門のモア (J. C. Moore) 博士は12種185例もの標本について観察を行っている。

で勉強会を行い、第1号標本との比較、文献的考察そして総合検討を加え、思い切って新種としての所見をまとめ得た。この間にあって、新種提案という功名心に走りがち私達の意見に対し、小川先生から何度かご注意をうけた。慎重な考察を基礎として展開させることの重要さを教えていただいた。

58年4月の日本水産学会大会にて「鯨目 *Mesoplodon* 属に加うべき新種について」を西脇・神谷で発表した。幸い *M. ginkgodens* は諸外国の研究者によって再検討され（特にモア博士の再吟味をへて）承認を得ることができ、今日に至っている。イチョウハクジラの命名者は西脇・神谷になっているが、本来なら小川先生に入っていた3名の研究であった。この点について、小川先生は私に「君の今後の研究活動に役立つであろう」と言われ、ご自身はひかれて私をたてて下さった。

生物の分類については、新種をたてると、リンネ先生と同列にその名が永遠に残ることから、機会にめぐり会えたら一度は新種提言をしてみたいものだ、誰れしもが考えることではなからうか。この点、小川先生も迷われたことがあったと伺っている。大磯の *Mesoplodon* について小川先生の書かれた短文がある。平凡社の「世界大百科月報」23号（1959年）に「珍鯨メゾプロオドン採集記」と題して書かれたものである。この中で1935年1月に宮崎県から送られてきた *Mesoplodon* 第1号標本について「最も苦労したのは、新種とすべきかどうかという問題で、わずか1頭の所見で新種を立てることは危険と思いました。ちがっているといってもその差異は別種とするほど重大なものといえないので、そのときまでに外国で報告されたなかで比較的近いと考えられたデンシロストリスという種類に無理だと思ったが同定しておきました」と書かれております。続いて大磯標本について「その骨を綿密にしらべ、1935年の分と比較してみたのですが、歯の形や位置が両者のあいだでよく似ています。種々検討した結果、4月2日の日本水産学会の集会で、西脇・神谷両氏の名前で、これはメゾプロオドンの1新種であろうことが発表されました。1935年の分もおそらくこれと同種でありましょう」と結ばれております。

上述の経過から私は、小川先生の名代として鯨目の分類表の一隅に名を連ねさせていただいている。分類学では、種名とその命名者が学界で承認され登録されると、その訂正や追記は許されない。私は *M. ginkgodens* (Nishiwaki & Kamiya) を目にすると、

Kamiya を Ogawa に読み替えている。

日本での歯鯨類の分類は、第二次大戦前に小川鼎三先生によって総論的な基礎的研究が確立され、大戦後に各論的な追加、再整理が西脇昌治先生を中心に推進された。分類学には研究者の一貫した哲学が要求される。分類に取り組む研究者は大きく二つのタイプに分けられる。すなわち、研究対象の細部の違いには余りこだわらず、基礎的な形質を重視してまとめていこうとする考え方をとる人（Lumper）と、少しでも異質の形質が認められると別種として細分化整理していく考え方に立つ人（Sliter）である。それぞれの考え方に優れた理論的な展開がみられるのだが、研究者が自己の主張に強く固執する例がまみられる。

小川先生は Lumper であり、西脇先生は Sliter に近い考え方で研究を進めてこられた。日本の歯鯨の分類については、総論と各論にそれぞれ最適任の先駆者を得て、今日の基盤が築かれてきたと言えよう。

扇歯鯨の見直し計画

昨83年6月に沖縄海洋博記念公園水族館を訪ねた。82年3月に沖縄本島中央部の東海岸に漂着したジュゴンの調査のためであった。この時に内田 隆三館長が *Mesoplodon* の頭蓋骨をみせて下さった。この個体は82年7月に沖縄本島西海岸（浦添市）に迷入した後、海岸に打ち上げてしまった鯨で、その頭蓋骨のみが収集、保存された。この標本については西脇先生もすでに観察されており、*M. ginkgodens* であるとの鑑定をされていた。

ジュゴンの調査には西脇先生も参加しておられ、帰路は九州大学農学部で開催された日本哺乳動物学会の年次大会に出席のため一緒に福岡へ飛んだ。この時の機内で先生からここ数年来に追加収集された *Ginkgodens* の骨格標本を比較検討し、*Ginkgodens* を再吟味しようとの提案をいただいた。

次頁の表は、過去50年間にわが国で確保され、学術研究の対象となった、または調査進行中のイチョウハクジラの骨格標本所在一覧である。全部で丁度10個体の資料が揃っている。1号から6号の標本についてはすでに研究報告がなされているが、7号から10号の標本に関しては未だ学術報告がなされていない。鴨川シーワールドの鳥羽山照夫館長が指揮をとって集取、保存されている標本が3例あって、この中の8号標本は妊娠個体で、体長33cmの雄の胎子を宿していた。また、10号標本は、体長が344cmと若い雌である。オオギハクジラ属では性差、成長段階による形態上の差異

表 1 わが国におけるイチョウハクジラ (*Mesoplodon ginkgodens*) 骨格標本保存一覧 (1984年 7 月現在)

	採集地	採集月日	体長 (cm)	性別	標本保存機関	報 告 者	備 考
1	宮崎県 外 浦	1935. 1. 6	—	♀ (推定)	国立科学博物館 分館	小川 鼎三 ('38)	頭蓋骨のみ
2	神奈川県 大磯	1957. 9. 22	472	♂	同 上	西脇 昌治・ 神谷 敏郎 ('58)	模式標本
3	宮城県 鮎川	不 詳	—	—	鮎川町立鯨博物館	西脇 昌治 ('62)	下顎骨のみ
4	千葉県 銚子	1968. 3. 12	—	—	東海大学海洋学部		下顎骨のみ
5	神奈川県 鎌倉	1968. 8. 23	470	♂	国立科学博物館 分館	西脇・粕谷・呉羽 ・小黒 ('72)	
6	静岡県 伊東	1971. 7. 18	477	♂	同 上	同 上	
7	千葉県 千代田	1974. 9. 19	495	♂	鴨川シーワールド	鳥羽山照夫 (調査中)	
8	千葉県 富津	1982. 4. 3	530	♀	同 上	同 上	体長33cm, 雄の 胎仔を摘出保存
9	沖縄県 浦添	1982. 7. 20	—	♂	沖縄海洋博記念公 園水族館	内田 詮三 (調査中)	頭蓋骨のみ
10	兵庫県 和歌山	1984. 3. 16	344	♀	日和山水族館	鳥羽山照夫 (調査中)	
台湾における報告例							
(11)	高雄港	1962. 1. 27	—	♀		楊 鴻嘉 ('64)	頭蓋骨のみ
(12)	基隆港	1963. 7. 26	588	♂		同 上	下顎歯のみ

が大きく現われる種類だけに、胎仔や幼体は大変貴重な比較資料である。近く所見がまとめられるとのことで、その結果がまたれる。

10個体の標本採集地をみると、北から鮎川、銚子、館山、富津、鎌倉、大磯、伊東、宮崎、沖繩と、本州から九州、沖縄にかけての太平洋岸である。さらに、台湾の基隆と高雄で1頭ずつのイチョウハクジラが採取、研究されている(楊鴻嘉, 1964)。台湾の2頭を加えると、鮎川から高雄までの一大連続線が画かれ、温暖な海域に生息していることが読みとれる。10号のみが黒潮分流入りによって日本海に入り北上している。このように、イチョウハクジラは日本近海ではかなりみられる種類である。私は鴨川シーワールドからの発表をまって、もう一度イチョウハクジラの見直しを行ない西脇先生との約束を果たしたいと願っている。

ここではイチョウハクジラのみを取上げたが、82年6月に茨城県大洗港で体長526cm、雌の *Mesoplodon* が打上げられ、その骨格標本が確保されている。この標本についても鳥羽山館長が調査中であるが、イチョウハクジラとは別種であるとの知らせをいただいた。

83年9月に沼津の海岸に体長530cmの *Mesoplodon* が打上げられ、三津シーパラダイスの中島将行館長が

苦労されて全身骨格の確保につとめられ、収集に成功されている。この個体も歯の特徴からみて、イチョウハクジラと異なる種類の由。

今年の5月に新潟市近くの海岸に体長490cmの歯鯨が打上げられ、水産庁日本海区水産研究所の池原宏二研究官によって、*Mesoplodon* であることが確認された。新潟標本については種の判定について私宛に連絡をいただいた。外形の写真からみると、この個体もイチョウハクジラとは別の種類である。全身骨格が保存(土中埋葬)されているので、今秋以降において共同研究が計画されている。

このようにイチョウハクジラ以外の種類も年々各地で収集されてきており、相互に連絡をとり比較検討することによって、オオギハクジラ属の分類に興味ある研究成果が得られると確信し、近く各研究担当の方々に連絡をとり、日本の *Mesoplodon* に関するシンポジウム開催を提唱したいと考えている。

銀杏歯鯨の学名

イチョウハクジラの学名 *M. ginkgodens* は、この鯨の歯にみられた大きな特徴である、a) 1対の大きな歯の厚みが非常に薄い点、b) 歯の外形が木の葉

に似ていたことと、本研究が主として東京大学で行なわれたことから東京大学の紋章であるイチョウの葉にあやかって、イチョウハクジラと命名した。英名は Ginkgo-toothed whale である。

イチョウの漢字は一般には銀杏と書き、学名は *Ginkgo biloba* LINNAEUS である。中国原産の樹木であるが、江戸時代に長崎のオランダ商館付医官として来日したドイツ人の医師、博物学者で、日本研究で知られるケンベル (Engelbert Kaempfer, 1651~1716) によって、日本特産の樹木として欧州に紹介された。ケンベルは1712年に著わした『廻国奇説』の中で、日本のイチョウを銀杏 (Ginkgo) として、写生図をつけて解説している。後年、リンネ (Carl von Linne, 1707~1778) はケンベルの所見に基づいて整理し *Ginkgo biloba* の学名を与えた。

銀杏 (ギンキョウ)、Ginkyo がなぜ Ginkgo と誤記されてしまったかについては、木下 奎太郎の随筆「銀杏と Ginkgo」に取り上げられている。その由来は、徳川の本草学者がケンベルの質問に対して、この樹を銀杏—Ginkyo と答えたのであろうと言う。銀杏はギンナン (銀色のあんず) である。ところがケンベルが Ginkyo と綴るべきものを、y を g に誤って校合し印刷して刊行したため、リンネはそのまま引用し学名に Ginkgo を採り入れたと説明されている。

イチョウの葉の形 (*ginkgo*) をした歯 (*dens*) をもった鯨としたが、上述のように Ginkgo は本来ギンナンのことであって葉ではない。葉は *biloba* (2つの部分からなる) と名付けられている。イチョウの葉をみると、中央に深い溝があって二分されている。これに対して歯の方には深い切れ込みは見られない。今にしてみると適切な命名であったとはいえない。私達の場合には Ginkgo を Ginkyo と正して *Ginkyo-dens* とすることもできたのだが、リンネ先生の先命名権を尊重して Ginkgo とした。このように Ginkgo は明らかに誤りであるのだが、その訂正は許されない。本通信上で論争された *Tursiops truncatus* の和名が、ハンドウイルカかバンドウイルカであるかについても、先命名者が根拠をもって命名されているので、先命名権は尊重されなければならない。ハンドウイルカは小川先生の提言であり、一方、バンドウイルカ派の旗頭は西脇先生であった。Ginkgo が活着するように、ハンドウイルカの和名も不滅ではなからうか。

雪男とカワイルカ

鯨といえば海の動物となるが、変わり種がいる。イルカの中には河の中のみ生息していて、生涯海に入らない種類がいる。この変わり種は淡水鯨、またはカワイルカと呼ばれ、世界に4種類いて、アジアに2種類 (ガンジス河と中国の長江) と南米に2種類 (アマゾン河とラプラタ河口) が分布している。カワイルカは鯨類の中でも最も原始的な形質を多くもっている種類で、脳の大きさなども小さく、その発達も余り良くない。鯨学における“生きている化石”である。それだけに鯨学の研究には欠かすことのできない貴重な存在となっている。ここ20年来、世界の鯨学者は競ってカワイルカの研究を行なってきた。

わが国におけるカワイルカの研究の発端をつくった人は小川鼎三先生とヒマラヤの雪男である。小川先生は1959年11月から翌年の2月にかけて、日本雪男学術探検隊を率いてヒマラヤへ学術調査に行かれた。その帰途、インドのカルカットでガンジス河のカワイルカの調査も行なわれた。生態調査にとどまらず、現地の漁師を動員して捕獲も試み、カワイルカを網で取り囲み、捕獲寸前(?)まで追い詰めたが、漁師全員がインド警察によって逆に一網打尽に保護されてしまい失敗に終わった。インドでは河川は軍事施設としての適用をうけており、いわば、異国人が軍事基地内に立入ってイルカを追い廻していた訳である。雪男探検隊はイルカの生け捕りには成功しなかったものの、生態写真や現地の様子など、カワイルカに関して多くの資料を持ち帰った。

ガンジスカワイルカ (*Platanista gangetica*) に関する小川先生の熱のこもった報告は、私達に新鮮な刺激を与えられ、海外の鯨類学術調査へ目をむけさせる引き金となった。昭和39年度の文部省海外学術調査研究費の募集に対して、東京大学医学部より「ガンジスカワイルカの学術調査」が申請された。研究代表者は細川宏教授 (1922~1966) であった。1961年に退官された小川鼎三先生の後を襲った細川教授は、小川先生がカワイルカに対して抱かれていた情熱をも引き継がれ海外学術調査を立案申請された。医学部から“イルカの海外学術調査申請”と話題にはなったものの、初回の申請は不採用に終わった。次年度において2回目の申請の準備がなされていたが、細川先生が病魔に冒かされ、教授就任後5年目の1966年に44歳の若さで亡くなられ、カワイルカ学術調査計画も挫折した。

東京大学第1次淡水イルカ学術調査隊が69年12月に

東パキスタン（現バングラデシュ）へ派遣された。研究代表者は東京大学海洋研究所の西脇昌治教授で、小川先生から細川先生へと受け継がれた計画をさらに西脇先生が引き継がれ実現された。小川先生がカルカッタのフグリー河でガンジスカワイルカを追いかけた年から10年目の快挙であった。

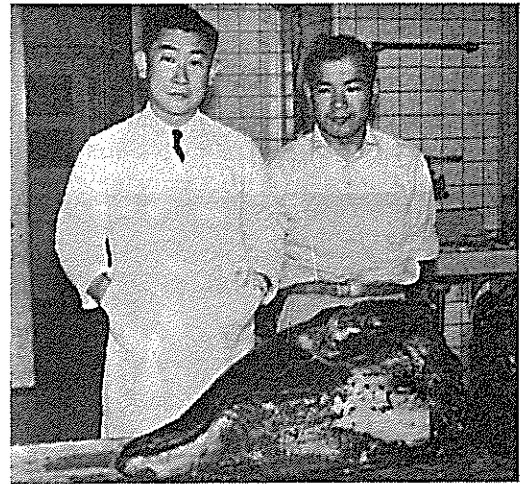
カワイルカ学術調査は、西脇先生の東京大学教授在職中に、第2次ラプラタカワイルカ (*Pontoporia blainvillei*) とアマゾンカワイルカ (*Inia geoffrensis*)、第3次インダスカワイルカ (*Platanista indii*) と続き、第4次でヨウスコウカワイルカ (*Lipotes vexillifer*) を中国の研究者と共同考察を行って終了した。「若い人に活発な研究活動ができるようにお膳立てするのが私の務め」と西脇先生は東西に奔走された。1965年から75年頃にかけての10年間は、期せずして世界各国の鯨学者がカワイルカに注目した時期であった。特にスイスのピレリー (G. Pilleri) 教授やアメリカのブランネル (R. L. Brownell Jr.) 博士らが活発に行動し、イギリスやフランス、オランダの学者達と提携して研究活動を行った。この中にあって日本も遅れじと現地調査を行い、立派な業績を挙げることができたのは、西脇先生の見識と行動力による賜物であった。日本で行なわれたカワイルカに関する研究の成果の多くは鯨研英文報告に掲載されている。

カワイルカの学術調査の仕上げは、ヨウスコウカワイルカの共同調査であった。南京師範大学生物学系主任の周開亜先生との提携で実施された長江流域での現地調査を契機にして、日中鯨学学术交流が一段と促進されるようになった。鯨研英文報告最新号には、周開亜先生のヨウスコウカワイルカの先祖型化石を調べられた大変興味のある論文「アジアで初めて発見された第三紀カワイルカ類化石」が掲載されているが、この論文の投稿手続についての労も西脇先生がとられている。

おわりに

今春、日本の鯨学の分野でお二人の碩学、小川鼎三先生と西脇昌治先生がお亡くなりになられた。研究者の数が極めて少ないわが国の鯨学界は一層寂しくなった。私は、小川先生に育てていただき、今日が在る。また、西脇先生からは長年にわたり研究面でのご交誼をいただいた。両先生をお慰びして、鯨類の研究上での憶い出を綴らせていただいた。

心からご冥福をお祈りいたしますとともに、今後とも日本の鯨学の発展を見守っていて下さいますようお願いして、追悼の筆を擱きます。



写真の説明

上：静岡県沼津市の三津天然水族館に保護されたコイワシクジラを観察中の小川鼎三先生。箱型の覗き眼鏡を手にされている (1959年秋)。先生は1934年夏にもこの水族館を訪ねておられ、その時はシャチと称して展示されていた歯鯨が *Tursiops* であることを指摘され、標示の訂正を求められた。当時まだ *Tursiops* に和名がつけられていなかったのも、当惑した水族館では「トルジョブスイルカ」と標示した。

下：わが国で2例目の *Mesoplodon* の頭部を前においての記念撮影 (1958年9月)。西脇昌治先生43歳、神谷敏郎28歳、東京大学医学部解剖学教室にて。後にこの標本が *M. ginkgodens* の模式標本となった。

メソプロドン、海に漂う

伊豆三津シーパラダイス

中島将行

1983年9月19日、静岡新聞に「迷走クジラの惨死」という見出しで、9月17日沼津市西浦の古宇の浜辺にあがったクジラの写真が載っていた。そのクジラの名はミンククジラともアカボウクジラともでていた。クジラはまだ生きていたので、ロープで尾をしばり、一応は沖へ出そうとしたが駄目で、そのまま放置したら翌18日朝には息絶えた、という記事であった。テレビでも放映したらしい。よく見ると、写真はメソプロドンであった。アカボウクジラではなく、ましてミンククジラではあり得なかった。



写真1 浜にあがったメソプロドン。吻端(左下)で上顎より下顎が長いことと、体表に無数のすり傷が目立つ(静岡新聞社提供)。

写真の顔がとても長く写っていたので、取材した記者に聞いたら、24%の広角レンズで撮ったものだった。

新聞にクジラの名がでていた時、アカボウクジラということが度々あるが、そのような時メソプロドンは同じ科で体形などが似ているのでよく確める必要がある。

メソプロドンは珍種なるが故に私にとって思い出深いものがある。以前にもその1つを見つけたことがあるからである。

1968年8月23日に鎌倉・材木座海岸の海水浴場に1頭のクジラがあがった。当時私が勤めていた江ノ島マリランドの者が早速現地へ急行し、それはアカボウクジラであったという連絡を藤沢の自宅で受けた。しかし念の為かけつけて見たらそれはメソプロドンであった。

夕暮れの中、肉はそがれ、骨は鋸でひかれて、クジラの体はバラバラ寸前の状態であった。

殺気立ってやたら動きまわっている人々の後に、ステテコに上半身裸の老人が1人、手には杖代りのようにまだ肉のついた肋骨を1本ぶら下げ、じっと立っている姿がなんとも印象的であった。

残った部分のプロポーションを急いで測ったが、海水浴シーズンの直前だったため、世話役に頼んでそのまま砂浜に埋めさせてもらい、秋風の吹くシーズン後になってから同行した粕谷俊雄さんやマリランドの係員たちと一緒に掘りおこした。それは体長4.7m、雄のイチヨウハククジラ *Mesoplodon ginkgodens* であった(Nishiwaki et al, 1972, 鯨研英文報告24)。

さて、新聞のクジラがあがった場所の古宇とは、三津の近くで、シーパラダイス(旧三津天然水族館)からは車で15分ほどの所である。

当日私は不在だったが、シーパラダイスの係員がかけつけた時にはもうクジラの姿はなく、海へ流れてしまったということだった。しかし実際は地元の人たちが肉をそぎ、あとは海へ捨ててしまったというのが真

相であった。

取材に当たった記者をはじめ地元の人たちも、そのクジラがメソプロドンの仲間、その属のものは世界でも日本でも数少ない珍種であったとは夢にも思わなかったという。

それを知った他の新聞、テレビも色めき立ち、協力して“クジラを探そう”とキャンペーンをしてくれた。係員たちが船に乗って探しまわっているところとか、私が L. Watson (1981) の本の絵を皆に見せて説明しているところとか……である。うまくすれば、どこかでいつかその何かが回収できると思った。それが浮いていようと、沈んでいようと、である。

体形、体色や模様とくに吻部の白さ、歯の位置や大きさなどから一応ハブスオオギハクジラ *M. carlhubbsi* Moore (1963), Arch beaked whale, Hubbs' beaked whale ではないかと推定した。

そもそもこの種のクジラは Dr. Carl L. Hubbs により 1946 年に報告されている。1945 年 7 月 25 日に米国カルホルニア州ラ・ホヤのスクリップス海洋研究所の近くに上がった体長 505cm、雄のクジラがはじめは *M. stejnegeri*, Stejneger's beaked whale と思われたが、ニュージーランドの 2 標本に照会した米国の Dr. Remington Kellogg により *M. bowdoini*, Andrews' beaked whale と同定され (Hubbs C. L., 1946, J. of Mammalogy)、その後 Dr. Moore によって *M. carlhubbsi* の新種記載となったのである (Moore J. C., 1963, The American Midland Naturalist)。

Dr. Hubbs によれば、6 日後、研究所にいた人たちや漁師がほかにも同じくメソプロドンらしきものを見て、そのクジラの大きさは 6m と推測されている。

ハブスオオギハクジラの生活圏の水温はふつう 10~20℃とされているが (Watson L., 1981)、西浦辺りのこの時期の表層水温は 25℃前後であった。

古宇からクジラの姿が消えて待つこと久しく、もう駄目かと思いはじめた頃の、6 日たった 9 月 22 日の夜のこと、おそくなって三島の借家で 1 人酒をのんでいるとシーバラダイスから電話がかかり、江ノ島以来同じ仕事をしている藤巻康年君のはずんだ声で、例のクジラが三保の真崎海岸にあがった、という。駿河湾をはさんで三津の反対側、車で 2 時間ほどの所である。

やはり、という感じであった。というのは当時風と潮の流れからして、メソプロドンがもし海を漂っているとしたら、流れ着くのはきっとその辺りか、という読みが私たちにあったからである。さらに話では、大

急ぎで人を呼び合い、トラックをしたら、もう三津動続 35 年地元通の山田二郎飼育長ほか係員 10 人ほどが集ったとか……。すばやい動きである。皆の熱意に応じて腰をあげ、酔いをさましながら夜の国道をひた走り、やっと現地に到着した時はすでに夜中であった。

案の定、クジラは薄暗い道路から 200m ほど離れた闇の中で砂利浜の波打ち際に残骸を横たえていた。それは思わず手を合わせたくなるような無慚な屍体であった。骨に辛うじて付いた頭と尾は腐って半ばとけ、ふくれた舌によって口は開き、眼球はとび出さんばかりであった。左右の下顎に 1 本ずつあるメソプロドン特有の平たい扇状の歯は両方共先が欠けて無かったが、まさしくそれはメソプロドンであった。幸にも骨格全体が崩れているように見え、できる範囲の外部プロポーシオンをすぐに計測した。

体長 5.3m、腐っていてもペニスがあり、雄と判明した。ペニスは鎌倉の時のイチョウハクジラのものと同じ細長い形であった。NHK ほかテレビも来た。真夜中なのに熱心であった。幾つかにバラし、魚市場用の大きなポリバケツに分けて、行ったり来たり、皆でなん回にも車へ運んだ。どうにもならない部分は浜に埋め、きれいに始末をした。シーバラダイスにたどりつき、大きな 500ℓ の FRP タンク 2 つにひとまず入れ終ったのはもう翌 23 日の夜明けまでであった。

翌日から骨づくりが始まった。つくり方は胸、腰椎など各部に離した骨を水漬けし、肉を腐らせ、殆んど腐りかけた椎間甲板のところをそのままに保ち、漂白剤で消毒もかね、乾かして部分毎に長いまま固めてしまうという方法であった。このやり方は私にとっては、1963 年 8 月 12 日に日本で初めてカズハゴンドウ (当時水江一弘先生はナカジマイルカにしたら、と言った) を発見し、その標準標本保存の時から方法である。

つくりかけの骨はものすごく臭く、建物からはるかに離れた作業場所からでも匂ったので、昼間はうっかりタンクの蓋もとれず、仕事するのは専ら夕方から夜にかけて殆んど私 1 人であった。タンクの中は油がギロギロと粘り、ほかのイルカや 2 年前の三津水族館 4 頭目のミンククジラなどの骨とはだいぶ違った感じであった。冬のことなので腐りも遅く、数カ月もかかってやっと骨が晒しあがり、翌年の 1984 年 2 月、マスコミ取材のため、協力への礼もかねて骨を並べてみた。苦労の甲斐あってしみじみと嬉しかった。骨はまだ油っぽく、その後もにじみ出た濃い胎色の油が受皿にたまって 300cc 以上にもなった。

体長 530cm は今までの資料では最大 “about 5.3m and 1,500kg” (Leatherwood S., et al, 1982, NOAA Tech. Rep. NMFS Circular 444) とされているので、今度のクジラは体長からしても、脊椎他各部位の骨の形状からも老令の感じであった。骨にして判ったが、骨折などの治った部分が11カ所ほどもあった。上下顎骨吻端、脊椎骨棘突起、肋骨などの部位である。

メソプロドンの肋骨のふくらみについては1971年7月28日のイチョウハクジラ、雄、477cmの伊東標本にもみられたと記載されている (Nishiwaki et al, 1972 前記)。

骨折は斗争のためか……雌のとりあいでもあったか？ 厳しい海の中を生き抜いてきた老鯨浜にあがって骨を残す——男として身にしみる想いである。

後日、附近の漁師の話では2日ほど前から近くの沖にクジラが2頭泳いでいたというし、クジラが浜にあがった時近くで釣りをしていた人や丘の上のミカン園で仕事をしていた人も、沖にもう1頭のクジラがいたようだったとも言っていた。もしそれが連合の雌だったとしたら、なんと哀れなことか……

Hubbs 先生には1956と67年の米國視察旅行の折に2回共、最初は西脇昌治先生と次は鳥羽山照夫さんと一緒に家に呼んでいただき、助手をなさっている奥さん共々楽しく通した思い出もあり、なつかしく、Hubbs 先生すでに亡く、西脇先生、小川鼎三先生も今春急逝された今、今度の出来事には因縁めいたものすら感じている。

メソプロドンについては Moore さんが権威でありアメリカでもお世話になり、その後も文献をいろいろ送って頂いていたので、この事を早速知らせた。もう70才になり奥さんと2人で悠々自適の生活をしている Moore さんからの1通目の手紙では何かと協力しようという親切な内容だった。さらに2通目では文献同封の上ひょっとして新種 *Mesoplodon nakajimae* だったらいいね、と嬉しいことが書いてあった。彼の希望によりそれまでの写真やデータをとり揃えて送った。やはり私としては知り得た資料からおおかたは *M. carlhubbsi* であるとみたが、頭骨に関して一部に Moore さんの記載とちょっとばかり違うところがあったのでその旨も伝えた。その後はまだ連絡はない。

メソプロドン分類上の Key の中でこの標本を西脇昌治・神谷敏郎両先生による特徴4項目に照合すると (西脇・神谷、日本水産学会誌 24—6・7, 1958, Nishiwaki M. & Kamiya T., 鯨研英文報告13、

1958)、次の通りであった。

① 上顎神経孔 maxillary foramen と間顎骨神経孔 premaxillary foramen の位置関係については prem. foramen がやや前ではあるが、ほぼ一線上に並んでいる。

② 吻の基部の上顎骨刻門部下面から吻端にむかって走る溝線 basirostral groove が存在する。

③ 一対の下顎歯の位置については、歯槽の吻寄りの位置が下顎縫合線の実際についているほぼ後縁になる。

④ 歯は大きく扁平で、歯の厚さと前後の長さの比は右 1:6.62、左 1:6.54 である。

以上の結果はこの標本が *M. carlhubbsi* である可能性を示している。

経過要約

1983年9月17日 静岡県沼津市西浦・古宇の浜、浜にあがる。生きていた。

翌9月18日 死亡後除肉され海へ。

↓ 駿河湾

1983年9月22日 同県清水市三保・真崎海岸、浜にあがった骨などを回収、伊豆三津シーパラダイスへ。

歯と骨の異常

歯は板状で露出部分つまり歯冠の部分は内外両面 (唇舌両側面) 共に表面平滑であるが、先が欠けて無く、その部分の前後の長さは直線的に左58、右44mmであり、斜め前にも欠損が続いている。欠損部分の中央には象牙質とおもわれる層が紙状にかつ凸状に見える。

歯根は腐蝕されたかのように表面は細い数多くの並行した凹凸の条模様となり、歯根の先はほぼ一線となっているが、幾つかの深い切りこみと、部分的に齶蝕 (虫歯) が目立つた。欠けた歯冠の上先縁には海綿動物とおもわれるものの1部かまたは痕跡が左の歯に1.5~2cm大2箇、右の歯には2cm大1箇が固く附着し、右歯の歯頸のあたりの側面にも1cm大が2箇認められた。

歯は何者かによって叩き折られたり、漂着時欠損したのではなく、生前すでに欠けていた、ということになる。

左右の歯を歯槽にはめこんで、並べて立てたところを前から見ると、わずかに舌側にカーブしているのがわかるが、これも *M. carlhubbsi* の特徴の1つであ

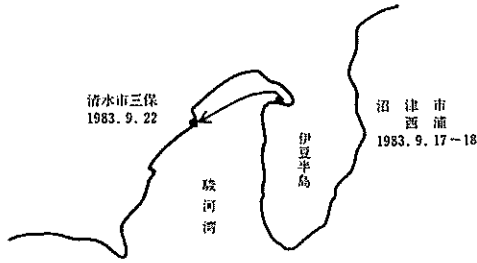


図1 メソプロドン屍体漂流コース

る (Watson L., 1981)。

骨に認められた病的な異常は次の諸点であった。

1. 上顎骨吻先端が疾病のためかくじけたようになっていて、その部分が短くなっている。外形では上下顎先端の差は6cmあって、下顎の方が長い。
2. 下顎骨先端結合部口内側に30×20×15mm大の卵形の陥凹部分があり、膿瘍によって侵蝕された後治癒した痕跡のように思われた。これは上顎骨先端の異常と関連したものであろう。
3. 脊椎骨にみられた骨折治癒の痕跡については、
 - 1) 頸椎……No. 1~3, 7の棘突起。
 - 2) 胸椎……No. 10~12、棘突起の中間ぐらゐの位置に体軸に沿って線状にふくれた痕跡があった。
 - 3) 肋骨……No. 5, 6、脊椎骨との関節側から3分の1ほどのカ所にこぶ状のふくらみがあった。

腸 怪 網

以前イルカを主として怪網 rete mirabile を研究した後、アカボウクジラ *Ziphius cavirostris* 5例とツチクジラ *Berardius bairdii* 1例を調べた結果、腸に沿ってかなり明瞭な怪網が存在するのを確認した。これを西成甫先生(故人)の御指導によって「アカボウクジラ科の鯨類に認められた腸怪網 rete (mirabile) intestinale」として新たに記載したが、その時同じ科の他の3属、オオギハクジラ *Mesopodon*、トックリクジラ *Hyperodon*、タスマニアクチバシクジラ *Tasmacetus* については捕獲が稀なため未検討であると記した(中島, 1961, 東邦医学会誌8-4., 1967, 解剖学雑誌42-5., 283-287)。

ところが、その翌年収集されたイチョウハクジラ鎌倉標本では腸に怪網は認められなかった(未発表)。そしてこんどのハブスオオギハクジラは腐っていたが、この屍体にまだ残っていた腸にも怪網は見当ら

なかった。そこでこれら2種2例からの拡大的な解剖をすれば、メソプロドン属には腸怪網は無い、と心得るかもしれない。

日本に於けるメソプロドンの報告例 (表1)

メソプロドンには現在12種あり、その中で主に北太平洋に分布するのは次の5種となっている (Watson L., 1981, Letherwood et al, 1982, Hoyt E., 1984)

1. *M. ginkgodens*, Japanese beaked whale
2. *M. carlhubbsi*, Arch beaked whale
3. *M. stejnegeri*, Bering Sea beaked whale
4. *M. densirostris*, Dense beaked whale
5. *M. hectori*, Hector's beaked whale

日本で今までに報告されているのは表に示したように1938年小川鼎三先生の発表以来1983年までに4種8例で、イチョウハクジラが4例でもっとも多く、西脇・神谷両先生による新種記載の理由もさることながら、英名 Japanese beaked whale にふさわしい感じがする。

ハブスオオギハクジラの世界での報告数は Dr. Moore の1966年のレポートでは日本の鮎川標本を含めて僅か5例であった (Norris K. S., edited, Univ. of Cal. Press, 1966)。その後例数は増えているものと思われるが、としても今度の沼津標本は世界でもさほど多くはない標本の1つであらう。日本でのこの種の報告は2例目となる。1例目は1958年8月26日の鮎川標本で、西脇・神谷両先生により *M. stejnegeri*、として発表され (Nishiwaki M. & Kamiya T., 1959, 鯨研英文報告14)、後に Dr. Moore によって *M. carlhubbsi* とされたものである (Moore J. C., 1963, 前記)。

性別については現標本を含めた日本の9例中7例が雄で、雌と確認されているのは1例のみである。

大きさは4~6mで、この種の体長としてはわりあい大きな個体が多く、主に成熟した雄が浜にあがっているようである。

日本のメソプロドン例はほかにも幾つかあるらしく、その1つは20年ほど前のこと、清水の魚市場にクジラがあがり解体後海へ捨てられてしまったが、それを Dr. Hubbs とたいへん親しかった岡田弥一郎先生(故人)がメソプロドンであったと知り、その辺りに潜水夫を入れてまで探索した。が遂に標本となるべきものは何も発見できなかった。はたして種類が何であったのか判らぬままである。

表1 日本に於けるメソプロドン報告例

順	標本採集年月日	場 所	性別	体長 (cm)	種 名	文 献
1	1935. 1. 6	九州・宮崎・外の浦	♀?	—	<i>M. densirostris</i>	Ogawa, T., 1938, Arb. Anat. Inst. Kaiserl., Japan Univ., Sendai, 21.
					<i>M. ginkgodens</i> (多分同じ、と記載)	Nishiwaki M. & Kamiya T., 1958, Sci. Rep. Whales Res. Inst., 13.
2	1957. 9. 22	神奈川・大磯	♂	472	<i>M. ginkgodens</i> (新 種)	— —、同 上 — —、1958、日本水産学会誌、24—6・7
3	1958. 8. 26	宮城・鮎川	♂	530	<i>M. stejnegeri</i>	— —、1959, S. R. W. R. I., 14.
					<i>M. carlhubbsi</i> (新 種)	Moore J. C., 1963, The American Midland Naturalist, 70—2.
4	1960. 5. 22	秋田・下浜	♂	600	<i>M. bowdoini</i>	Nishiwaki M., 1962, S. R. W. R. I., 16
5	1963. 4. 23	新潟・佐渡・弾崎	♂	520	<i>M. stejnegeri</i>	Nishimura S. & Nishiwaki M., 1964, Seto Mar. Biol. Lab., 428.
6	1963. 5. 10	大和堆の南東、39°N 135°E	♀	239	<i>M. stejnegeri</i>	— —、同 上
7	1968. 8. 23	神奈川・鎌倉・材木座	♂	470	<i>M. ginkgodens</i>	Nishiwaki M., Kasuya T., Kureha K., Oguro N., 1972, S. R. W. R. I., 24.
8	1971. 7. 28	静岡・伊東	♂	477	<i>M. ginkgodens</i>	— — — —、同 上
本例	1983. 9. 17	静岡・沼津・西浦	♂	530	<i>M. carlhubbsi</i>	

一方、1968年3月13日、千葉県銚子にあがった個体については当時岡田先生と青木光義氏（東海大）らが調査されたが、西脇先生らの報告文中にはイチョウハクジラの1標本として紹介されている（Nishiwaki et al, 1972, 前記）。

また最近兵庫県日和山遊園からは「1984年3月16日、地元定置網に日本海ではめずらしいイチョウハク

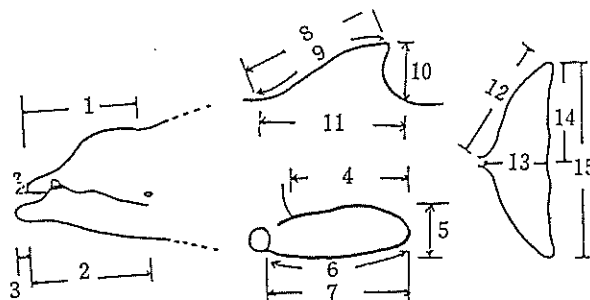
ジラの幼体らしき個体が捕獲され、輸送中死亡、体長334cm、推定体重350kg、雌」と報告されている（動水協月報、1984—3）。

終りに、標本回収と原稿のまとめに当たりたいへんお世話になった報道関係、シーパラダイスの方々、そして神谷敏郎先生、加藤秀弘さんに謝意を表します。

付表1 外部形態測定値

単位 mm

測定部位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
測定値	420	440	60	370	145	470	450	370	380	190	335	860	410	700	1400



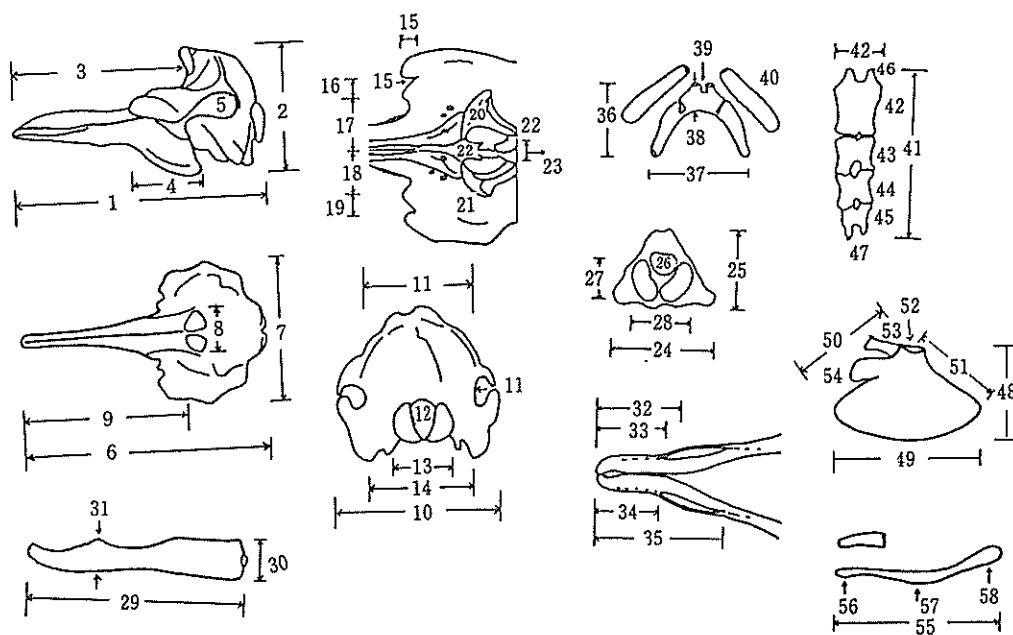
付図1 外部形態測定部位

付表2 骨格類測定値(その1)

(単位: mm)

測定部位	測定部位	測定部位	側測部位
1. 725	21. 88	35. R. 237	L. 268
2. 330	22. 30	L. 233	51. R. 225
3. 560	23. 33	36. 144	L. 228
4. 190×130 ¹⁾	24. 206	37. 185	52. R. 68×45 ¹⁾
5. 115×50×70 ²⁾	25. 161	38. 55	L. 68×45 ¹⁾
6. 725	26. 57×42 ¹⁾	39. 10×10 ¹⁾	53. R. 80×35 ¹⁾
7. 385	27. 121	40. R. 158×36×36 ²⁾	L. 80×35 ¹⁾
8. 122	28. 67	L. 164×38×26 ²⁾	54. R. 110×55 ¹⁾
9. 590	29. R. 683	41. 603	L. 105×56 ¹⁾
10. 385	L. 683	42. 240×165 ¹⁾	55. R. (32)
11. 220	30. R. 118	43. 125×138 ¹⁾	L. 98
12. 55×50 ¹⁾	L. 112	44. 120×135 ¹⁾	56. R. 10×6 ¹⁾
13. 126	31. R. 88	45. 118×100 ¹⁾	L. 6×4 ¹⁾
14. 280	L. 80	46. 55×40 ¹⁾	57. R. —
15. 25	32. R. 164	47. 55×25 ¹⁾	L. 9×7 ¹⁾
16. 50	L. 164	48. R. 250	58. R. —
17. 95	33. R. 135	L. 245	L. 12×5 ¹⁾
18. 85	L. 135	49. R. 382	
19. 55	34. R. 126	L. 378	
20. 108	L. 126	50. R. 263	

- 1) 長さ×幅
- 2) 長さ×幅×高さ



付図2 骨格類測定部位

付表3 骨 格 類 測 定 値 (その2)

脊椎骨		単位：mm				
測定部位 ¹⁾	L	H	W	HH	WW	
頸 椎 計 7	1	{ 59	68	{ 161	206	
	2				189	
	3	12		120	134	
	4	15		118	133	
	5	{ 30		146	111	
	6			58	145	138
	7	23		57	70	179
胸 椎 計 10	8	29	57	65	224	167
	9	40	57	66	265	184
	10	54	58	65	290	185
	11	62	54	64	307	187
	12	70	54	65	318	183
	13	78	56	68	334	180
	14	85	58	75	345	170
	15	89	60	76	369	182
	16	97	65	80	368	240
	17	102	67	86	384	284
腰 椎 計 10	18	108	71	91	399	304
	19	116	75	92	413	316
	20	119	76	92	423	326
	21	123	80	93	440	328
	22	128	82	94	449	(317)欠
	23	137	84	95	456	(316) "
	24	145	91	101	458	(331) "
	25	151	92	105	455	(317) "
	26	159	95	106	449	(314) "
	27	162	99	106	437	337
腰 椎 計 10	28	160	103	108	422	327
	29	152	106	110	401	293
	30	142	105	110	382	275
	31	130	105	111	356	263
	32	127	104	114	327	241
	33	120	104	115	292	202
	34	112	105	113	260	155
	35	104	104	106	220	122
	36	98	103	95	191	98
	37	86	103	89	181	92
	38	68	96	86	106	90
	39	55	75	80	87	87
	40	47	52	63	71	73
	41	44	47	59	60	72
	42	41	41	54	52	66
	43	38	35	48	44	55
	44	37	29	38	35	48
45	30	25	30	28	36	
46	25	17	19	24	28	
47	14	12	13	16	16	

1) L：椎体の長さ、H：同高さ、W：同幅、
HH：棟突起までの全高、WW：横突起間の全高

肋骨		単位：mm		
測定部位 ²⁾		SL	CL	W
1	R	34	38	—
	L	35	37	73
2	R	51	57	—
	L	54	60	65
3	R	63	70	—
	L	62	69	50
4	R	66	74	—
	L	66	76	43
5	R	70	78	—
	L	67	79	37
6	R	67	80	—
	L	68	82	34
7	R	67	78	—
	L	68	80	30
8	R	62	70	—
	L	63	70	27
9	R	58	61	—
	L	60	62	29
10	R	51	55	—
	L	55	57	23

2) SL：直線長、CL：曲線長、W：幅

V字骨		単位：mm		
測定部位 ³⁾		L	H	W
1	R	48	55	—
	L	52	54	—
2	R	55	97	—
	L	53	92	—
3		79	122	68
4		92	161	68
5		106	141	73
6		98	110	75
7		88	88	72
8		82	63	65
9		74	38	50
10	R	36	23	—
	L	37	20	—

3) L：長さ、H：高さ、W：幅

訂 正

前号 (355)、79 ページ右段の見出し

2) 小型捕鯨 を削除。 (編集部)